

# わが国のいじめの長期的影響に関する研究動向と展望 (2) －いじめ被害体験が対人関係に与える影響－

亀田 秀子\*・藤枝 静暁\*\*・会沢 信彦\*\*\*

## Trends in and Future Prospects for Research on the Long-term Effects of Bullying in Japan (2): The Effect of Having Been Bullied on Interpersonal Relationships

Hideko KAMEDA, Shizuaki FUJIEDA, Nobuhiko AIZAWA

**要旨** 本研究の目的は、1980年から2016年までの37年間に発表されたわが国におけるいじめの長期的影響に関する論文を対象に、いじめ被害体験が対人関係に与える影響について検討することである。対象文献は質的研究8本(21事例)、量的研究3本であった。その結果、質的研究におけるいじめ被害体験が対人関係に与える影響として、【他者尊重】、【精神的強さ】の肯定的影響、【同調傾向】、【他者評価への過敏】、【人間関係構築の戸惑い】、【対人不信】、【対人恐怖】の否定的影響が明らかになった。量的研究におけるいじめ被害体験が対人関係に与える影響として、【他者尊重】の肯定的影響、【同調傾向】、【他者評価への過敏】の否定的影響が明らかになった。本研究からの提言として、いじめ被害体験が与える影響としての【対人不信】や【対人恐怖】に陥っている人たちに対する心理的ケアが求められていると考えられる。

**キーワード**：いじめ被害体験 いじめの長期的影響 対人関係に与える影響 質的研究 量的研究

### 問題と目的

文部科学省の平成28年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によれば、小中学校、高校、特別支援学校におけるいじめの認知件数は323,143件で、過去最多であることが分かった(文部科学省初等中等教育局生徒指導課, 2018)。

わが国の学校におけるいじめ問題は、1980年代以降、深刻な社会問題として国内に認知されるようになり、研究者や教育関係者は本格的な取り組みを行ってきたが、依然としていじめの認知件数は憂慮すべき現状であるといえよう。

いじめ被害の影響には、抑うつや不安、自尊心の低下、心身症、対人不安などの不適應症状が現われることが明らかにされており(岡安・高山, 2000)、不適應状態は少なくとも青年期後期まで持続するといわれている(荒木, 2005)。

いじめの長期的影響については、いじめられた経験が、いじめられる状態を脱した後にも身体的または精神的に持続的な影響を及ぼすことが報告されている(坂西, 1995; 坂西・岡本, 2004)。さらに、いじめられた体験が強ければ強いほど、長期的な影響も強くなっていると述べられている(坂西, 1995)。

しかし、いじめられた体験は、否定的影響ばかりでなく、肯定的影響もあると坂西(1995)や香取(1999)は指摘している。

\* かめだ ひでこ 十文字学園女子大学人間生活学部

\*\* ふじえだ しずあき 埼玉学園大学人間学部

\*\*\* あいざわ のぶひこ 文教大学教育学部

「いじめの長期的影響」の期間について定義している論文は見当たらないが、本研究では、坂西(1995)も指摘しているところの、「いじめを脱した短期間、例えば、半年や1年という時間の経過ではなく、それ以上の年数が経過した後のいじめの影響」と捉えることにする。

亀田・会沢・藤枝(2017)は、1980年から2016年までのわが国におけるいじめの長期的影響に関する研究動向を明らかにしている。亀田ら(2017)によれば、いじめの長期的影響に関する質的研究では、いじめ被害体験と精神障害・外傷後ストレス障害に関連する研究(立花, 1990; 久留・餅原, 1995; 細澤, 2004; 伊東, 2009; 片柳, 2016)が多くみられたという。また、いじめの長期的影響に関する量的研究では、いじめ被害体験と身体的・精神的・心理的影響との関連に関する研究(奥村・川口・河原・長井, 1988; 坂西, 1995; 小熊・四ノ宮・生村, 1998; 香取, 1999等)が蓄積されてきていることを報告している。

一方、いじめ被害体験が対人関係に与える長期的影響も重要である。つまり、小学校・中学校・高校における過去のいじめの被害体験が、現在の対人関係にどのような影響を与えるかについての研究が求められる。

中島(2007)は、女子大学生153名を対象として、いじめ被害体験とその影響を検討した。いじめ被害体験の影響は、現在の自己像や対人関係の持ち方に negative にも positive にも影響を及ぼしていることを示唆している。

香取(1999)は、マイナスの影響としての「情緒的不適応」、「同調傾向」、「他者評価への過敏」、プラスの影響としての「他者尊重」、「精神的強さ」、「進路選択への影響」の6因子を抽出している。笠井・三屋(2004)は、いじめが対人関係のあり方に及ぼす影響として、香取(1999)が抽出した6因子のうち、「他者尊重」、「同調傾向」、「他者評価への過敏」の3つが対人関係のあり方にかかわるものであるとしている。本研究でも、笠井・三屋(2004)にならい、香取(1999)の「他者尊重」、

「同調傾向」、「他者評価への過敏」の3因子について、対人関係と関連の深い質問項目を参考にして、いじめ被害体験が対人関係に与える影響について検討する。

いじめ被害体験の長期的影響には、いじめの影響の方向性を決める要因として、いじめられた時期、いじめの内容、いじめへの対処法が関与していると考えられる。坂西(1995)によれば、友人に援助を求めることや、いじめの加害者に対して無抵抗の姿勢ではなく、反撃するなどの積極的な姿勢をとることが、いじめ解決への重要な鍵となることを明らかにしている。本研究においても、いじめへの対処法と対人関係に与える影響について検討していくものとする。また、いじめられた時期、いじめの内容と対人関係に与える影響についても検討していく。

対人関係について、笠井・三屋(2004)は、「いじめは人と人との関わり(対人関係)のなかで生じるもの」として捉えている。

本研究では、1980年から2016年までの37年間のわが国におけるいじめの長期的影響に関する論文を対象に、いじめ被害体験が対人関係に与える影響について検討することを目的とする。

## 方法

### 1. 文献の抽出の方法

文献の抽出に際しては、国立国会図書館(NDL Search)と国立情報研究所(CiNii)を用いた。「いじめ+影響」、「いじめ+予後」、「いじめ+回復」、「いじめ+事例」、「いじめ+ケース」を検索語として検索し、1980年から2016年までのわが国の学会誌論文・大学紀要論文を抽出した。また、これらを研究方法から質的研究と量的研究に分類した。

なお、抽出に際しては大会発表・発表要旨、資料、シンポジウム等は対象から除外した。

### 2. 対象文献の分析の方法

本研究では、質的研究、量的研究を包括して分析し、統合的に説明していくものとする。問いに

対する記述内容（ローデータ）をそれぞれ断片化し、類似の文献の記述内容をまとめあげてカテゴリーの同定を行うものとする。

## 結果と考察

### 1. いじめの長期的影響に関する 37 年間の論文数

いじめの長期的影響に関する論文数については、1980 年から 2016 年までを 10 年スパンで区切り、みていくことにする。第 I 期は、1980 年から 1989 年、第 II 期は、1990 年から 1999 年、第 III 期は、2000 年から 2009 年、第 IV 期は、2010 年から 2016 年とした。

第 I 期は、質的研究はなく、量的研究は 1 本、計 1 本であった。第 II 期は、質的研究は 3 本、量

的研究は 7 本、計 10 本であった。第 III 期は、質的研究は 9 本、量的研究は 9 本、計 18 本であった。第 IV 期は、質的研究は 5 本、量的研究は 22 本、計 27 本であった。

いじめの長期的影響に関する論文は、質的研究 17 本、量的研究 39 本、合計 56 本が該当した。

### 2. 質的研究におけるいじめ被害体験が対人関係に与える影響

#### (1) 対象文献の選定

分析の対象とする文献を選定するために論文のタイトル、本文の内容を確認した。その結果、いじめ被害体験と対人関係に与える影響との関連を示唆している論文は 8 本あり、それらを対象文献

Table 1 質的研究 対象文献の概要

文献番号	著者 (発刊年)	論文タイトル	研究方法 データ収集法	研究対象者人数・ 事例；学年・年齢 (性別)	重要な語句 理論等
1	久留・餅原 (1995)	外傷後ストレス障害 (PTSD) に関する治療心理学的研究 - 極度のいじめの事例を通して -	事例研究 半構造化面接 治療過程の報告	1 名 事例 1 : 17 歳 (男性)	心理療法, 自律訓練の習得: 「睡眠障害」の克服
2	清水 (1998)	「いじめられ体験」が人格発達に及ぼす阻害的影響について - 自己愛性格症例の治療経験から -	事例研究 半構造化面接 治療過程の報告	1 名 事例 1 : 23 歳 (男性)	Kohut 理論: 自己愛的障害の治療における共感の理解を明確に位置づけた自己愛的人格の治療
3	三浦 (2002)	いじめ過程モデルの検証 - いじめ被害者の事例を通して -	事例研究 半構造化面接 個別の事例分析	1 名 事例 1 : 29 歳 (女性)	スメルサーの集団行動理論の援用: 6 段階からなる「いじめ過程モデル」の構築
4	細澤 (2004)	いじめを契機とする外傷後ストレス障害の力動的心理学療法	事例研究 半構造化面接 心理学療法の過程の記述	1 名 事例 1 : 21 歳 (女性)	心理療法, 中核的葛藤, 基底欠損水準, 力動的心理学療法, PTSD の 3 主徴 (DSM-IV): ①再体験, ②回避・麻痺, ③覚醒亢進状態
5	伊東 (2009)	いじめから心身症状を呈した思春期女子の心理治療過程	事例 (症例) 研究 半構造化面接 心理治療過程の記述	1 名 事例 1 : 13 歳 (女性)	心理治療: 十分なアセスメントによる適切な治療, 病院, 学校, 家庭との連携
6	岩崎・海蔵寺 (2011)	過去のいじめられた経験からの回復過程について - 自己否定感のあるクライアントの事例を通して -	事例研究 半構造化面接 回復過程を時間の経過に沿って報告	1 名 事例 1 : 23 歳 (男性)	心理的支援, 共感的理解, 客観的認知の推進
7	亀田・相良 (2011)	過去のいじめられた体験の影響と自己成長感をもたらす要因の検討 - いじめられた体験から自己成長感に至るプロセスの検討 -	事例研究 半構造化面接	10 名 事例 1 : 22 歳 (女性) 事例 2 : 20 歳 (女性) 事例 3 : 21 歳 (女性) 事例 4 : 21 歳 (女性) 事例 5 : 20 歳 (男性) 事例 6 : 20 歳 (女性) 事例 7 : 20 歳 (男性) 事例 8 : 21 歳 (男性) 事例 9 : 21 歳 (女性) 事例 10 : 21 歳 (男性)	自己成長感: 辛い出来事でもその体験を経て, 自己の成長を自覚していることを「自己成長感」と定義する
8	橋本 (2012)	レジリエンシーに関する一考察 - いじめからの回復の語り -	事例研究 半構造化面接	5 名 事例 1 : 21 歳 (女性) 事例 2 : 22 歳 (女性) 事例 3 : 24 歳 (女性) 事例 4 : 18 歳 (女性) 事例 5 : 18 歳 (女性)	レジリエンシー: 危機に直面しながらも適応に成功する力

Table 2 質的研究 対象文献の内容一覧

文献 番号	著者 (発刊年)	①初発のいじめからの経過年数, ②いじめられた時期, ③いじめの内容, ④対処法, ⑤対人関係に与える影響, ⑥いじめの影響
1	久留・餅原 (1995)	<b>事例1</b> : ①初発から3年。②高校でのいじめ。③高校入学と同時に、寮生活を始めるが、正義感の強い彼に対して、深夜に突然、極度のいじめ、暴力が数か月続いた。④無抵抗。⑥嘔吐、睡眠障害、うつ状態、無気力さなど続く。PTSDの発現。不登校状態が続く、高校を退学し、部屋に閉じこもる。
2	清水 (1998)	<b>事例1</b> : ①初発から10年。②中学校でのいじめ。③学校のトイレに呼び出されたり、上級生の不良のリーダーから脅しの電話があり、怖い思いをした。④無抵抗。学校では怯えながら、自分が目立たないように努めて辛うじて自分の居場所を得ていた。⑤対人恐怖症状:対人緊張、視線恐怖など。他者への不信任感、誇大感の切り離し、自己評価の低下。⑥高1の時に、心の病を患う。以来、何年間も家に閉じこもる。
3	三浦 (2002)	<b>事例1</b> : ①初発から16年。②中学校でのいじめ。③友人関係のこじれにより、無視されて精神的に追い込まれる。④無抵抗。⑥いじめで落ち込む。「何もしたくない、学校にも行きたくない」と話す。いじめ体験の痛手が癒されているとは言えない、そのため、母親と姉へのインタビューを実施。おとなしい性格で、口数は少ない。控えめで話を聞くタイプ。
4	細澤 (2004)	<b>事例1</b> : ①初発から10年。②・③小学校・中学校での言葉と暴力による慢性のいじめを経験。④無抵抗。⑥大学入学後、高校時の恋人との別れをきっかけにPTSD症状が発現、外傷後ストレス障害に陥る。いじめによる心的外傷、情動の不安定、引きこもり、不眠。
5	伊東 (2009)	<b>事例1</b> : ①初発から2年。②小学校・中学校でのいじめ。③からかいやクラスの数名から無視される嫌がらせのいじめが続いている。④無抵抗。⑤情緒的不適応、他者評価への過敏傾向。⑥再度いじめを受けて、心身症状、自傷行為を発症。いじめの状況が思い出され、不安が高まる。
6	岩崎・海蔵寺 (2011)	<b>事例1</b> : ①初発から16年。②・③小学校・中学校でのいじめ。小学校入学時よりチック症状が出現。症状をからかわれるいじめが繰り返された。④無抵抗。⑤小学校では友だちはいない。中学では数人とだけ話しをする。対人不信感。自己否定感。親からも教師からも心理的サポートを受けられず、孤立無援。見捨てられ不安。⑥心療内科を受診し、睡眠導入剤、安定剤を服薬。
7	亀田・相良 (2011)	<b>事例1</b> : ①初発から12年。②・③小学校・中学校での言葉による嫌がらせのいじめ。④母がいじめに気づいてくれた。教師によるソーシャルサポートを得られた。⑤言い返せるようになった。自分がされて嫌なことは人にしない。⑥いじめを乗り越えられた。いじめを通して成長できた。自分の性格がよい方向へ変わった。 <b>事例2</b> : ①初発から13年。②・③小学校・中学校での嫌がらせや脅しによるいじめ。④自己開示(部活の顧問)。⑤自分が言われて嫌なことは人に言わない。⑥いじめを乗り越えられた。いじめを通して成長できた。周囲にいじめを訴えて向かっていく力があつた。 <b>事例3</b> : ①初発から8年。②・③部活時の無視や仲間はずれなど、中学校でのいじめ。④自己開示(父)。⑤人に流されなくなった。自分で気にしないようにして、いじめを乗り越えた。精神的に強くなろうとしていた。⑥いじめを通して成長できた。 <b>事例4</b> : ①初発から8年。②・③部活時の嫌がらせと仲間はずれ。中学校・高校のいじめ。④自己開示(母とメル友)。メル友に気軽に相談できた。周囲の援助を得た。⑤嫌いな人でも困ったことがあれば相談に乗って楽にしてあげたい。⑥よく耐えて乗り越えたと思う。いじめを通して成長できた。 <b>事例5</b> : ①初発から11年。②・③小学校・中学校・高校での言葉のいじめ。④自己開示(家族・友達・先生)。泣きながら周囲に訴えた。やり返しているうちに、乗り越えられた。⑤いじめをされている人の辛さもわかるし、相談に乗ることもできる。⑥いじめを通して成長できた。自分で変わる努力をした。いい経験だったと思う。 <b>事例6</b> : ①初発から13年。②・③小学校での命令と悪口、脅しによるいじめ。④無抵抗。⑤悪口を言われていても黙って聞いていた。⑥いじめを乗り越えた感じはない。いじめた子は自分と友達になりたかっただけ。このいじめがきっかけで成長したということはない。 <b>事例7</b> : ①初発から13年。②・③小1・中2で友だちから石を投げられる。小学校・中学校でのいじめ。④無抵抗。中2で両親が離婚。信頼できる友達はいない。⑤自分も他人も信じられない。自分は必要ない存在なのかなと思った。⑥いじめは未消化のまま引きずっている。いじめを通して成長していない。 <b>事例8</b> : ①初発から13年。②小学校・中学校・高校でのいじめ。③使いつ走り等の脅しのいじめ。④無抵抗。相談しても良くなるとは限らない。⑤今でも人と関わるときに戸惑う。対人関係上でいじめの影響が出ていると思う。仮面をかぶった自分がある。⑥いじめを通して成長したとはいえない。 <b>事例9</b> : ①初発から14年。②・③小学校1年から中学校3年まで身体的なあだ名を言われるいじめ。親しい友達はいない。④母親に相談。⑤人見知りになってしまっ、いじめの影響と関係があると思う。⑥いじめを乗り越えるのは絶対に無理。思い出すと辛いし…。変えようのないことだったので、だから、余計にそれが腹立たしい。 <b>事例10</b> : ①初発から11年。②・③小学校での言葉のいじめ。④無抵抗。消極的でおとなしい。友だちはいない。⑤いじめの影響で人前で話すのが苦手になって…。⑥今でも思い出すのでいじめは乗り越えていない。いじめを通して成長していない。自己主張できないタイプだった。⑤いじめの影響で人前で話すのが苦手になって…。
8	橋本 (2012)	<b>事例1</b> : ①初発から8年。②・③中学校から高校までの言葉によるいじめ。高校においても続き、加害者側からの言動によって今現在も傷つけられる状態にある。④無抵抗。⑥初期のうつ病。 <b>事例2</b> : ①初発から6年。②・③言葉の暴力、誹謗中傷する内容のいじめ。高校でのいじめで不登校になり、保健室登校となる。④無抵抗。⑥心療内科へ通院。学校に通えなくなり、家に引きこもる。 <b>事例3</b> : ①初発から6～8年。②・③高校で、言いがかりや一方的な嫌がらせのいじめ。何度もいじめの標的となる。④無抵抗。⑤高校時代、いじめの影響から疑心暗鬼になる。大学における人間関係の構築において戸惑いや失敗体験をしている。 <b>事例4</b> : ①初発から8年。②・③小学校で言葉のいじめ。「キモイ」、「消えろ」など毎日のように言われるうちに「死ななければならないのではないか」との思いが芽生えた。④無抵抗。⑤男子に対する恐怖心を抱いていた。⑥いじめ発覚以降の長期間に渡り、体験の影響を受けていた。 <b>事例5</b> : ①初発から6～11年。②小・中でのいじめ。③ハンディーキャップや場面緘黙を有することを理由とした言葉や暴力によるいじめを何度も体験した。④無抵抗。場面緘黙を有していた時期もあった。⑥強いストレスのために円形脱毛症になることもあった。

とした。内訳は、学会誌論文2本、大学紀要論文6本であった。

(2) 対象文献の概要

対象文献の概要(文献番号、著者、発刊年、論文タイトル、研究方法・データ収集法、研究対象者、重要な語句、理論等)について、Table 1に示した。研究方法は、すべて事例研究であり、データ収集法は半構造化面接によるものであった。対象文献8本における事例は計21事例であり、男性7名、女性14名であった。

事例の表記の仕方は、まず、文献番号を記し、続いて文献内の事例の順番を示している。

(3) 対象文献の内容

分析対象となった8本の文献、21事例について、①初発のいじめからの経過年数、②いじめられた時期、③いじめの内容、④対処法、⑤対人関係に与える影響、⑥いじめの影響、の6点について

て整理を行った(Table2, Table 3)。

初発のいじめからの経過年数では、2年以上5年未満は2事例、5年以上10年未満は7事例、10年以上経過している事例が12事例であった。初発のいじめから10年以上経過している事例が半数を超えていることが分かる。

いじめられた時期(複数回答)については、小学校でのいじめが3事例、中学校でのいじめが3事例、高校でのいじめが3事例であった。小学校と中学校でのいじめは8事例、中学校と高校でのいじめは2事例、小学校と中学校と高校でのいじめは2事例であった。1つの学校段階のいじめは9事例であり、複数の学校段階にまたがるいじめが12事例であった。長期間にわたるいじめ被害体験であることが分かる。

いじめの内容(複数回答)については、暴力によるいじめが3事例、嫌がらせによるいじめが

Table 3 質的研究 対象文献の要点一覧

文献番号 事例番号 (性別)	経過年数	いじめの時期			いじめの内容			対処法			対人関係への影響					いじめの影響							
		小学校	中学校	高校	暴力	嫌がらせ	仲間外れ	脅し	無抵抗	相談した	周囲からのサポート	他者尊重	精神的強さ	同調傾向	他者評価への過敏	人間関係構築の戸惑い	対人不信	対人恐怖	不登校	引きこもり	心療内科受診等	心の病・うつ病	P T S D の発現
1-1 (男性)	3年			○	○				○										○	○			○
2-1 (男性)	10年		○					○	○					○			○	○		○			○
3-1 (女性)	16年		○				○		○														
4-1 (女性)	10年	○	○		○				○											○			○
5-1 (女性)	2年	○	○			○			○					○									
6-1 (男性)	16年	○	○			○			○								○				○		
7-1 (女性)	12年	○	○			○				○		○	○										
7-2 (女性)	13年	○	○			○		○		○			○										
7-3 (女性)	8年		○			○	○		○				○										
7-4 (女性)	8年		○	○		○	○		○				○										
7-5 (男性)	11年	○	○	○		○			○				○										
7-6 (女性)	13年	○				○		○	○					○									
7-7 (男性)	13年	○	○		○				○								○						
7-8 (男性)	13年	○	○	○				○	○				○	○									
7-9 (女性)	14年	○	○			○				○							○						
7-10 (男性)	11年	○				○			○								○						
8-1 (女性)	8年		○	○		○			○														○
8-2 (女性)	6年			○		○			○										○	○	○		
8-3 (女性)	6~8年			○		○				○							○						
8-4 (女性)	8年	○				○				○								○					
8-5 (女性)	6~11年	○	○		○	○			○					○									

10事例, 仲間外れによるいじめが1事例, 脅しによるいじめが2事例であった。暴力と嫌がらせによるいじめが1事例, 嫌がらせと脅しによるいじめが2事例, 暴力と仲間外れによるいじめが2事例であった。

いじめへの対処法では, 何もしなかった「無抵抗」が13事例, 「相談した」が6事例, 「周囲からのサポート」のあった事例は2事例である。「相談した」6事例のうち5事例が女性であった。嶋(1992)によれば, 「男性は困難な問題に遭遇した場合でも, 他者からの援助を受けずに独力でそれを解決することが期待されがちである」と述べており, 本研究結果にも当てはまると考えられる。

対人関係以外のいじめの影響については, 心療内科受診に至った事例(6-1), 心の病・うつ病に該当した事例(8-1), 不登校・引きこもり・PTSDの発現に至った事例(1-1), 引きこもり・

心の病・うつ病に該当する事例(2-1), 引きこもり・PTSDの発現に至った事例(4-1), 不登校・引きこもり・診療内科受診に該当した事例(8-2)の6事例が該当した。心療内科受診, うつ病, PTSDの発現等, 精神疾患に至るといふ深刻な状況に陥っていることが分かる。

#### (4) いじめ被害体験が対人関係に与える影響の検討

いじめ被害体験が対人関係に与える影響について, Table 4に示した。21事例から本テーマに対する記述内容(ローデータ)をそれぞれ断片化し, 類似の文献の記述内容をまとめあげてカテゴリーの同定を行った。本文中では記述内容は「」, カテゴリーは【】で表記した。

その結果, 【他者尊重】, 【精神的強さ】, 【同調傾向】, 【他者評価への過敏】, 【人間関係構築の戸惑い】, 【対人不信】, 【対人恐怖】の7つのカテゴ

Table 4 質的研究におけるいじめ被害体験が対人関係に与える影響

肯定的影響	否定的影響
<p><b>【他者尊重】</b>                      「自分がされて嫌なことは人にしない」7-1                      「自分が言われて嫌なことは人に言わない」7-2                      「嫌いな人でも困ったことがあれば相談に乗って楽にしたい」7-4                      「いじめをされている人の辛さもわかるし, 相談に乗ることもできる」7-5</p>	<p><b>【同調傾向】</b>                      「悪口を言われても黙って聞いていた」7-6                      「仮面をかぶった自分がある」7-8                      「場面緘黙を有していた時期もあった」8-5                      「自分で目立たないように努めた」2-1</p>
<p><b>【精神的強さ】</b>                      「言い返せるようになった」7-1                      「人に流されないようになった」7-3</p>	<p><b>【他者評価への過敏】</b>                      「他者評価への過敏傾向」5-1                      「今でも人と関わるときに戸惑う」7-8                      「人前で話すのが苦手になって」7-10</p>
	<p><b>【人間関係構築の戸惑い】</b>                      「人間関係の構築において戸惑いや失敗体験をしている」8-3</p>
	<p><b>【対人不信】</b>                      「他者への不信感」2-1                      「対人不信感」6-1                      「自分も他人も信じられない」7-7                      「人見知りになってしまった」7-9</p>
	<p><b>【対人恐怖】</b>                      「対人恐怖症状: 対人緊張, 視線恐怖」2-1                      「男子に対する恐怖心を抱いた」8-4</p>

リーにまとめられ、計 20 の記述内容から構成された。7つのカテゴリーについて述べていくが、いじめられた時期、いじめの内容、対処法については Table 2 と Table 3 を参照されたい。

【他者尊重】では、事例 7-1, 7-2, 7-4, 7-5 の 4 事例、4つの記述内容が該当した。いじめられた時期は小学校と中学校に該当するものが 2 事例、中学校と高校に該当するものが 1 事例、小学校と中学校と高校に該当するものが 1 事例であった。1つの学校段階ではなく、4事例とも複数の学校段階でのいじめであることが分かった。

いじめの内容は、嫌がらせが 2 事例、嫌がらせと脅しによるものが 1 事例、嫌がらせと仲間外れによるものが 1 事例であった。嫌がらせによるいじめは 4 事例に当てはまっていた。対処法は、「相談した」に該当するものが 3 事例であり、1事例は母が気づいてくれた「周囲からのサポート」であった。

いじめられた時期は、4事例とも複数の学校段階でのいじめであり、いじめの内容によるものは、嫌がらせによるものが 4 事例該当した。対処法では、「相談した」もしくは、「周囲からのサポート」によるものであった。対人関係に与える影響としての【他者尊重】に至るには、相談という積極的な対処法や周囲からのサポートが関連していると思われる。相談することや周囲からのサポートにより、いじめを乗り越えやすくなり、いじめ被害体験を糧に【他者尊重】に至ったと考えられる。

【精神的強さ】では、事例 7-1, 7-3 の 2 事例で、2つの記述内容が該当した。いじめられた時期は、中学校に該当するものが 1 事例、小学校と中学校に該当するものが 1 事例であった。いじめの内容は、嫌がらせによるものが 1 事例、嫌がらせと仲間外れによるものが 1 事例であった。対処法は、「相談した」に該当するものが 1 事例、「周囲のサポート」に該当するものが 1 事例であった。

対人関係に与える影響としての【精神的強さ】は、2事例とも嫌がらせによるいじめが該当している。対処法は積極的な対処法である「相談した」、

または、「周囲のサポート」であった。【精神的強さ】に至るには、積極的な対処法を取り、言い返せるようになったり (7-1)、人に流されないようになったり (7-3) していることが分かる。

いじめに遭った時に、積極的に相談して対処したり、自分で言い返したりして対処したりする姿勢をもつことによって、いじめが解消されることが示唆された。このことは、自分の力で解決したという自信や自己効力感につながるものであろう。いじめ被害体験を糧に精神的に強くなれたとプラスの解釈に至ったものと考えられる。

【同調傾向】は、事例 2-1, 7-6, 7-8, 8-5 の 4 事例で、4つの記述内容が該当した。いじめられた時期は、小学校に該当するものが 1 事例、中学校に該当するものが 1 事例、小学校と中学校に該当するものが 1 事例、小学校と中学校と高校に該当するものが 1 事例であった。

いじめの内容は、脅しによるものが 2 事例、嫌がらせと脅しによるものが 1 事例、暴力と嫌がらせによるものが 1 事例である。対処法は、何もしなかった「無抵抗」に該当するものが 4 事例である。脅しに該当するいじめが 3 事例あるが、脅されることにより恐怖心を抱き、再び、脅しを受けることがないように周囲に同調することが予想される。

【他者評価への過敏】は、事例 5-1, 7-8, 7-10 の 3 事例で、3つの記述内容が該当した。いじめられた時期は、小学校に該当するものが 1 事例、小学校と中学校に該当するものが 1 事例、小学校と中学校と高校に該当するものが 1 事例である。いじめの内容は、嫌がらせによるものが 2 事例、脅しによるものが 1 事例であった。対処法は、何も対処しなかった「無抵抗」によるものが 3 事例であった。嫌がらせや脅しによるいじめは、再び繰り返されることのないように、他者からの評価に過敏になってしまうことが予想される。

【人間関係構築の戸惑い】は、事例 8-3 の 1 事例で、1つの記述内容が該当した。いじめられた時期は、高校であり、いじめの内容は嫌がらせ

によるものであった。対処法は「相談した」である。高校という発達段階でのいじめは、自我同一性の確立が課題でもあり、その後の人間関係構築への戸惑いを生じさせてしまうことが示唆された。

【対人不信】は、事例2-1, 6-1, 7-7, 7-9の4事例で、4つの記述内容が該当した。いじめられた時期は、中学校に該当するものが1事

Table 5 量的研究 対象文献の概要

文献番号	著者 (発刊年)	論文タイトル	研究方法	研究対象者人数・事例：学年・年齢 (性別)	重要な語句
1	笠井・三屋 (2004)	いじめ経験が対人関係のあり方に及ぼす影響	質問紙調査	私立大学の学生・447名 (男子216名・女子231名)	いじめの役割, 被害者, 加害者, 傍観者
2	野中・永田 (2010)	過去のいじめ体験が青年期に及ぼす影響 - 体験の時期と発達の関連 -	質問紙調査	大学生 (男女396名)	同調傾向, 自尊感情, 他者評価への過敏
3	山口・長野 (2012)	過去のいじめられた体験が青年期の友人関係に及ぼす影響	質問紙調査	大学1年生・337名 (男子129名, 女子208名)	過去のいじめ体験, 青年期, 友人関係

Table 6 量的研究 対象文献の内容一覧

文献番号	著者 (発刊年)	①調査内容, ②いじめられた時期, ③いじめの内容, ④対処法, ⑤対人関係関係に与える影響
1	笠井・三屋 (2004)	①いじめ経験の有無・役割と影響の有無・程度, ②被害者は男子34名(21.8%), 女子59名(30.4%), ③いじめの内容については触れていない, ④対処法については触れていない, ⑤1) 他者尊重:「相手の気持ちや立場を考えながら自分の意見を述べる」, 男子では影響あり22名(64.7%), 女子は56名(94.9%)で有意差が認められ, 女子の方が影響を受けている者が多い, 2) 他者尊重:「人に思いやりを持って接するようになった」, 男子では影響あり22名(64.7%), 女子では51名(86.4%)で有意差が認められ, 女子の方が影響を受けている者が多い, 3) 他者尊重:「自分がされて嫌なことは人にしなくなった」, 男子では影響あり25名(73.5%), 女子では53名(89.8%)で有意差が認められ, 女子の方が影響を受けている者が多い, 4) 同調傾向:「みんなと同じにしようと思った」, 男子では影響あり9名(26.5%), 女子では26名(44.1%)で有意な傾向が認められ, 女子の方が影響を受けている者が多い傾向がある, 5) 他者評価への過敏:「嫌われないよう人に気をつかうようになった」, 男子では影響あり18名(52.9%), 女子は45名(76.3%)で有意差が認められ, 女子の方が影響を受けている者が多い, 6) 他者評価への過敏:「人の態度に敏感になった」, 男子では影響あり20名(58.8%), 女子は49名(83.1%)で有意差が認められ, 女子の方が影響を受けている者が多い, 7) 他者評価への過敏:「人からどのように思われているかが気になるようになった」, 男子では影響あり24名(70.6%), 女子は51名(86.4%)で有意な傾向が認められ, 女子の方が影響を受けている者が多い傾向にある, 8) 他者評価への過敏:「誰かと一緒にいないと不安になるようになった」, 男子では影響あり9名(26.5%), 女子では27名(45.8%)で性差について有意な傾向が認められ, 女子の方が影響を受けている者が多い傾向にある。
2	野中・永田 (2010)	①いじめ体験の時期とその後の影響との関係について, ②いじめ“体験のある群”は, 311人(78.5%), “体験ない群”は85人(21.5%)であった。男子のいじめ体験は, 124人(74.7%), 女子のいじめ体験は, 187人(81.3%)であった。いじめ体験の時期は, 小学校・中学校が25.9%, 中学校が16.7%, 小学校が15.7%, 小学校・中学校・高校が10.2%, 中学校・高校が9.8%, 高校が7.9%であった。3) 複数時期は全体の57.7%である。⑤1) 小学校以前・小学校時期のいじめ体験の影響“同調傾向”は, その後の自尊感情に影響を及ぼす。同調傾向が増せば増すほど, 他者に同調しようとする事により, 自尊感情も高くなる。2) 中学校時期のいじめ体験の影響“他者評価への過敏”は, その後の友人関係に影響を及ぼす。他者への評価が過敏になればなるほど友人関係は深まる。複数時期のいじめ体験の影響“他者評価への過敏”は, その後の友人関係に影響を及ぼす。他者への評価が過敏になればなるほど友人関係は深まる。
3	山口・長野 (2012)	①過去のいじめられた体験が友人関係の希薄化に及ぼす影響について, ②被害者の経験をしている人は全体の32%, 被害者は男性が18名(14%), 女性が42名(20%)である。いじめられた時期は, 小学校から中学校にかけていじめられる体験をしている人が多い。③いじめの内容では, 男性は「嫌がらせ」が多く, 女性は「嫌がらせ」と「仲間はずれ」が多い。④いじめの対処法については, 「自分だけで反撃した」という学生は13名(21.7%)であった。男性7名(38.9%), 女性6名(14.3%)であった。⑤被害者は, 「被害者かつ加害者」と「無関係」よりも傷つけられることを回避し, 被害者は, 「被害者かつ加害者」よりも傷つけることを回避する傾向があり, 被害者においてはいじめ体験が何らかの形でその後の友人関係に影響していることが示唆された。

例であり、小学校と中学校に該当するものが3事例であった。いじめの内容は、嫌がらせによるものが2事例、脅しによるものが1事例、暴力によるものが1事例である。対処しなかった「無抵抗」に該当するものは3事例、「相談した」に該当するものが1事例であった。小学校と中学校の2つの学校段階でのいじめは3事例が該当しているが、学校段階が変わっても長期にわたりいじめを受けることで、対人不信を抱いてしまうことが示唆された。

【対人恐怖】は、事例2-1, 8-4の2事例で、2つの記述内容が該当した。いじめられた時期は、小学校に該当するものが1事例、中学校に該当するものが1事例であった。いじめの内容は、脅しによるいじめが1事例、嫌がらせによるいじめが1事例であり、対処法は何も対処しなかった「無抵抗」が1事例、「周囲のサポート」が1事例であった。1つの学校段階のいじめであっても、いじめの内容やいじめの質により、対人恐怖を感じて心に大きな傷として残ることが予想できる。

### 3. 量的研究におけるいじめ被害体験が対人関係に与える影響

#### (1) 対象文献の選定

分析の対象とする文献を選定するために論文のタイトル、本文の内容を確認した。その結果、いじめの被害体験が対人関係に与える影響について検討している論文は3本あり、それらを対象文献とした。3本とも大学紀要論文であった。

#### (2) 対象文献の概要

対象文献の概要(文献番号、著者、発刊年、論文タイトル、研究方法、研究対象者、重要な語句)について、Table 5に示した。研究方法は、すべて質問紙調査によるものであり、研究対象者は大学生であった。

#### (3) 対象文献の内容

分析対象となった3本の文献について、①調査内容、②いじめられた時期、③いじめの内容、④対処法、⑤対人関係に与える影響、の5点につい

て整理を行った(Table 6)。

#### (4) いじめ被害体験が対人関係に与える影響の検討

いじめ被害体験が対人関係に与える影響について、Table 7に示した。3つの文献から問いに対する記述内容(ローデータ)をそれぞれ断片化し、類似の文献の記述内容をまとめあげてカテゴリーの同定を行った。本文中では記述内容は「」、カテゴリーは【】で表記した。

その結果、【他者尊重】、【同調傾向】、【他者評価への過敏】の3つのカテゴリーにまとめられ、計11の記述内容から構成された。

【他者尊重】に関する記述内容は、文献1において3つ該当した。文献1-1)「相手の気持ちや立場を考えながら自分の意見を述べる」、文献1-2)「人に思いやりを持って接するようになった」、文献1-3)「自分がされて嫌なことは人にしなくなった」の各々に対して、「影響あり」の結果を得ており、いずれも女子は男子よりも影響を受けている者が有意に多いことが明らかとなった。いずれの項目も円滑な対人関係の形成に資する内容のものであると考えられる。

いじめられた体験により、【他者尊重】という肯定的な影響を男子も女子も受けており、男子よりも女子の方が影響を強く受けていることが明らかになった。

【同調傾向】は、文献1と2において、2つの記述内容が該当した。文献1-4)では、「みんなと同じようにしようと思うようになった」の項目に対して、女子は男子よりも影響を受けている者が有意に多いことが明らかとなった。文献2-1)によれば、小学校以前・小学校時期のいじめ体験の影響における“同調傾向”が増加するほど自尊感情が高くなるという。

同調傾向はマイナスの影響に捉えられがちであるが、野中・永田(2010)は、その後の自尊感情に影響を与え、自尊感情を高めるというプラスの影響もあると指摘している。しかしながら、「同調」は、自己防衛的な回避傾向と解釈することもでき、

対人関係において、消極的姿勢をもたらすことにもつながる恐れがあるともいえるだろう。

【他者評価への過敏】は、文献1では4つの記述内容、文献2では2つの記述内容が該当した。

文献1-5)では、「嫌われないよう人に気をつかうようになった」の項目、文献1-6)では、「人の態度に敏感になった」の項目、文献1-7)では、「人からどのように思われているかが気になるようになった」の項目、文献1-8)では、「誰かと一緒にいないと不安になるようになった」の各々の項目に対して、女子は男子よりも他者に影響を受けている者が有意に多いことが明らかとなった。他者評価への過敏は度が過ぎると対人場面の回避などの望ましくない行動が生じる恐れがあると考えられる。

文献2-2)の中学校時代のいじめ体験の影響

における“他者評価への過敏”，文献2-3)の複数時期のいじめの影響における“他者評価への過敏”については，その後の友人関係において，他者への評価が過敏になればなるほど友人関係は深まることが示唆された。

#### 4. 質的研究と量的研究に共通するいじめ被害体験が対人関係に与える影響の検討

質的研究と量的研究に共通して抽出された3つのカテゴリー，【他者尊重】，【同調傾向】，【他者評価への過敏】に注目して考察する。

質的研究における【他者尊重】では，4つの記述内容があげられた。たとえば，「自分がされて嫌なことは人にしない」(7-1)，「自分が言われて嫌なことは人に言わない」(7-2)である。これは，量的研究における【他者尊重】での，「自分が

Table 7 量的研究におけるいじめ被害体験が対人関係に与える影響

肯定的影響	否定的影響
<p><b>【他者尊重】</b>                      1-1) 他者尊重：「相手の気持ちや立場を考えながら自分の意見を述べる」，影響あり：男子22名(64.7%)&lt;女子56名(94.9%)                      1-2) 他者尊重：「人に思いやりを持って接するようになった」，影響あり：男子22名(64.7%)&lt;女子51名(86.4%)                      1-3) 他者尊重：「自分がされて嫌なことは人にしなくなった」，影響あり：男子25名(73.5%)&lt;女子53名(89.8%)</p>	<p><b>【同調傾向】</b>                      1-4) 同調傾向：「みんなと同じにしようと思うようになった」，影響あり：男子9名(26.5%)&lt;女子26名(44.1%)                      2-1) 小学校以前・小学校時代のいじめ体験の影響“同調傾向”：その後の自尊感情に影響を及ぼす。同調傾向が増せば増すほど，他者に同調しようとすることにより，自尊感情も高くなる。</p>
	<p><b>【他者評価への過敏】</b>                      1-5) 他者評価への過敏：「嫌われないよう人に気をつかうようになった」，影響あり：男子18名(52.9%)&lt;女子45名(76.3%)                      1-6) 他者評価への過敏：「人の態度に敏感になった」，影響あり：男子20名(58.8%)&lt;女子49名(83.1%)                      1-7) 他者評価への過敏：「人からどのように思われているかが気になるようになった」，影響あり：男子24名(70.6%)&lt;女子51名(86.4%)                      1-8) 他者評価への過敏：「誰かと一緒にいないと不安になるようになった」，男子では影響あり9名(26.5%)，女子27名(45.8%)                      2-2) 中学校時代のいじめ体験の影響“他者評価への過敏”：その後の友人関係に影響を及ぼす。他者への評価が過敏になればなるほど友人関係は深まる。                      2-3) 複数時期のいじめ体験の影響“他者評価への過敏”：その後の友人関係に影響を及ぼす。他者への評価が過敏になればなるほど友人関係は深まる。</p>

されて嫌なことは人にしなくなった」の項目と一致していることが分かる。いじめを体験することにより、自分が受けた辛い体験は、人に味わわせたくないというプラスの考えを持つようになることが、質的研究からも量的研究からも示唆されたといえよう。

質的研究における【同調傾向】をみていくと、記述内容の「悪口を言われても黙っていた」(7-6)は、香取(1999)の抽出した同調傾向の「自分の考えや意見をいうのを抑えるようになった」の項目に一致するものである。また、記述内容の「仮面をかぶった自分がある」(7-8)、「場面緘黙を有していた時期もあった」(8-5)、「自分で目立たないように努めた」(2-1)は、香取(1999)の抽出した同調傾向の「目立たないようにしようと思うようになった」の項目に一致するものである。

いじめられた体験により、自分の考えや意見を言うことを抑えたり、目立たないように周囲に同調したりして、再び、いじめ被害に遭わないように自分を守っていることが示唆されたといえよう。

量的研究における【同調傾向】では、「みんなと同じようにしようと思うようになった」(1-4)の項目があげられている。また、2-1)では、小学校以前・小学校時期のいじめ体験の影響における「同調傾向」は、同調傾向が増せば増すほど、他者に同調しようとすることにより、自尊感情も高くなることが報告された。同調傾向が増すことにより、自尊感情も高くなるという現象は、今後の研究における新たな視点として捉えられるものであろう。

質的研究における【他者評価への過敏】では、「他者評価への過敏傾向」(5-1)、「今でも人と関わるときに戸惑う」(7-8)、「人前で話すのが苦手になって」(7-10)という3つの記述内容が抽出された。これは、香取(1999)の抽出した他者評価への過敏の「人の態度に過敏になった」、「人からどのように思われているのか気になるように

なった」に一致するものと考えられる。量的研究における【他者評価への過敏】においても、「人の態度に過敏になった」(1-6)、「人からどのように思われているのか気になるようになった」(1-7)があげられている。さらに、「嫌われないように人に気をつかうようになった」(1-5)、「誰かと一緒にいないと不安になるようになった」(1-8)という記述も存在した。質的研究からも量的研究からも、いじめ被害体験により他者評価への過敏傾向が強くなることが示唆されたといえよう。

文献2-2)中学校時期のいじめ体験の影響における「他者評価への過敏」、文献2-3)複数時期のいじめ体験の影響における「他者評価への過敏」は、他者への評価が過敏になればなるほど友人関係は深まることを示唆している。他者評価への過敏傾向が強まることで、相手の気持ちや評価をいち早く汲み取ることができるようになり、結果として、友人関係が深まっていくのであろう。

##### 5. 質的研究のみにみられるいじめ被害体験が対人関係に与える影響の検討

質的研究のみに抽出されたカテゴリーは、【精神的強さ】、【人間関係構築の戸惑い】、【対人不信】、【対人恐怖】の4つが該当した。

【精神的強さ】では、「言い返せるようになった」(7-1)、「人に流されないようになった」(7-3)の記述内容である。いじめられた体験を糧に、言い返すことの大切さや人に流されない強さを体得したものと考えられる。【人間関係構築の戸惑い】については、「人間関係の構築において戸惑いや失敗体験している」(8-3)の記述内容であり、いじめられた体験の影響として人間関係の構築に影響を与えていることが分かる。【対人不信】においては、「他者への不信感」(2-1)のみでなく、「自分も他人も信じられない」(7-7)状態に陥っていることが分かる。【対人恐怖】では、対人緊張、視線恐怖の「対人恐怖症状」(2-1)をあげており、また、「男子に対する恐怖心を抱いた」(8-4)

ことも明らかになった。

質的研究によって、量的研究では捉えることのできない個々のいじめ被害体験による影響が示唆されることから、質的研究は量的研究を補完するものであるといえよう。

### 本研究からの提言と今後の課題

本研究の目的は、1980年から2016年までの37年間のわが国におけるいじめの長期的影響に関する論文を対象に、いじめ被害体験が対人関係に与える影響について検討することであった。

その結果、質的研究におけるいじめ被害体験が対人関係に与える影響として、【他者尊重】、【精神的強さ】、【同調傾向】、【他者評価への過敏】、【人間関係構築の戸惑い】、【対人不信】、【対人恐怖】の7つのカテゴリーが明らかになった。

いじめ被害体験が対人関係に与える影響には、【他者尊重】や【精神的強さ】の肯定的影響がみられた。いじめ被害体験から、いじめを乗り越え、それを糧に【他者尊重】や【精神的強さ】が培われたものと考えられる。

坂西(1995)の研究では、いじめ被害体験による苦痛が大きい人は、苦痛が小さい人に比べて、「相手の気持ちをよく考えるようになった」、「我慢強くなった」等の【他者尊重】や【精神的強さ】に該当する項目得点が有意に高く、いじめ被害体験が必ずしもマイナスの影響のみを与えるものではないことを報告しており、本研究結果とも一致する。

一方、否定的影響の【同調傾向】や【他者評価への過敏】については、いじめ被害体験から自分を守る一つの方法として、同調したり、他者評価に過敏になったりすると考えられる。

さらに、いじめ被害体験として【対人不信】や【対人恐怖】の否定的影響が明らかになった。荒木(1996)は、いじめ被害体験者は対人関係の不安で悩む者が多く、視線恐怖、自己臭恐怖などの対人恐怖の症状を呈する者もいると指摘している。また、岡田・永井(1990)によれば、いじめ被害

体験者はそうでない者に比べ、その後抑うつ的で、自己評価が低くなり、それに伴って対人恐怖心性が高くなるであろうと推測している。

石橋・若林・内藤・鹿野(1999)は、対人恐怖に至るプロセスについて言及している。いじめ被害体験者はいじめを受けた際に、「自分に何か欠点があるからいじめられる」というようにいじめられる理由を考えることに捉われると指摘している。そのため、自分の欠点を必要以上に意識し、対人場面における緊張感の高まり、人を不快にさせるのではないかという「関係の自己意識」の混乱を生み出し、これらの悪循環にとらわれ、「内省的自己意識」が低下していき、対人恐怖的となることが考えられると報告している。

1つ目の提言として、これらの知見からも、いじめ被害体験が与える影響としての【対人不信】や【対人恐怖】に陥っている人たちに対する心理的なケアが求められると考えられる。

量的研究におけるいじめ被害体験が対人関係に与える影響として、【他者尊重】の肯定的影響、【同調傾向】、【他者評価への過敏】の否定的影響が明らかになった。

笠井・三屋(2004)の研究では、【同調傾向】の「みんなと同じようにしようと思うようになった」の項目に対して、女子は男子よりも影響を受けている者が多いことを報告している。また、【他者評価への過敏】では、「嫌われないように人につかろうようになった」の項目、「人の態度に敏感になった」の項目、「人からどのように思われているかが気になるようになった」の項目、「誰かと一緒にいないと不安になるようになった」の各々の項目に対して、女子は男子より影響を受けている者が多いことが示唆された。

いじめ被害体験が対人関係に与える影響としての【同調傾向】や【他者評価への過敏】の性差について、三島(1997)は、集団のなかで起きるいじめは女子に多いこと、排他性・親密性は女子の方が高いことを明らかにしている。いじめが関係性を利用した攻撃であれば、関係性が密なほどダ

メージが大きいことを示唆している。

2つ目の提言として、いじめ被害体験が対人関係に与える影響としての【同調傾向】や【他者評価への過敏】について、どのような心理的ケアが求められるかについての検討が必要である。

質的研究と量的研究に共通して抽出されたのは、【他者尊重】、【同調傾向】、【他者評価への過敏】の3つのカテゴリーであった。また、質的研究のみに抽出されたカテゴリーは、【精神的強さ】、【人間関係構築の戸惑い】、【対人不信】、【対人恐怖】の4つのカテゴリーであった。一方の研究結果をもう一方の研究結果で裏づけることや、より深い理解を求めて2つのアプローチを補完していくことも重要であるといえよう。

今後の課題は、研究方法についてである。質的研究と量的研究の特徴を理解しつつ、質的研究および量的研究を組み合わせ、統合して分析を行うことで、研究テーマに沿ったより深い結果が得られるのではないだろうか。

近年、混合型研究法が注目されている。混合型研究法は、「研究課題をより深く理解するために、量的研究および質的研究を組み合わせる」という研究アプローチであるという(抱井・成田, 2016)。今後、研究法に関する検討も求められる。

## 引用文献

- 荒木乳根子 (1996). 過去のいじめられ体験の心理的影響 土居健郎 (監) 学校メンタルヘルス実践事典 日本図書センター, 419 - 426.
- 荒木 剛 (2005). いじめ被害体験者の青年期後期におけるレジリエンス (resilience) に寄与する要因について パーソナリティ研究, 14, 54 - 68.
- 坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害認知の差 社会心理学研究, 11, 105 - 115.
- 坂西友秀・岡本祐子 (2004). いじめ・いじめられる青少年の心 北大路書房
- 橋本 綾 (2012). リジリエンシーに関する一考察 - いじめからの回復の語り - 山梨英和大学心理臨床センター紀要, 8, 30 - 37.
- 久留一郎・餅原尚子 (1995). ストレス障害 (PTSD) に関する治療心理学的研究 - 極度のいじめの事例を通して - 鹿児島大学教育学部研究紀要, 47, 121 - 141.
- 細澤 仁 (2004). いじめを契機とする外傷後ストレス障害の力動的な心理療法 心理臨床学研究, 22, 240 - 249.
- 石橋佐枝子・若林慎一郎・内藤 徹・鹿野輝三 (1999). 大学生の過去のいじめ被害経験とその後遺症の研究 - 対人恐怖心性との関わり - 金城学院大学研究所紀要, 3, 11 - 19.
- 伊東真里 (2009). いじめから心身症状を呈した思春期女子の心理治療過程 吉備国際大学紀要, 19, 59 - 66.
- 岩崎久志・海蔵寺陽子 (2011). 過去のいじめられ経験からの回復過程について - 自己否定感のあるクライアントの事例を通して - 流通科学大学論集, 24, 29 - 39.
- 抱井尚子・成田慶一 (2016). 混合研究法への誘い 質的・量的研究を統合する新しい実践研究アプローチ 遠見書房
- 亀田秀子・会沢信彦・藤枝静暁 (2017). わが国のいじめの長期的影響に関する研究動向と展望 - 1980年から2016年までの学術論文・大学紀要論文における研究の動向と課題 - 文教大学教育学部紀要, 51, 333 - 347.
- 亀田秀子・相良順子 (2011). 過去のいじめられた体験の影響と自己成長感をもたらす要因の検討 - いじめられた体験から自己成長感に至るプロセスの検討 - カウンセリング研究, 44, 277 - 267.
- 笠井達夫・三屋喜子 (2004). いじめ経験が対人関係のあり方に及ぼす影響 徳島文理大学研究紀要, 67, 35 - 48.
- 片柳章子 (2016). いじめや体罰が被害生徒に重篤な精神症状を呈する構造について ストレスマネジメント研究, 12, 97 - 104.
- 香取早苗 (1999). 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究 カウンセリング研究, 3, 1 - 13.
- 三島浩路 (1997). 対人関係能力の低下といじめ 名古屋大学教育学部紀要. 心理学, 44, 3 - 9.
- 三浦恭子 (2002). いじめ過程モデルの検証 - いじめ被害者の事例を通じて - 奈良女子大学社会学論集, 9, 19 - 39.
- 文部科学省初等中等教育局生徒指導課 (2018). 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査 (確定値)
- 中島千加子 (2007). 女子大学生のいじめの体験とそ

- の影響 洗足論叢, 36, 83 - 94.
- 野中公子・永田俊明 (2010). 過去のいじめ体験が青年期に及ぼす影響: 体験の時期と発達に関連 九州看護福祉大学紀要, 12, 115 - 124.
- 小熊順子・四ノ宮美恵子・生村浩史 (1998). 当センター入所者の学校生活等に関する調査から - 過去のいじめ・いじめられ体験と予後との関連について - 国立身体障害者リハビリテーションセンター研究紀要, 19, 47 - 56.
- 岡田 努・永井 撤 (1990). 青年の自己評価と対人恐怖心性との関連 心理学研究, 60, 386 - 389.
- 岡安孝弘・高山 巖 (2000). 中学校におけるいじめ被害および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, 48, 410 - 421.
- 奥村武久・川口 侃・河原 啓・長井 勇 (1988). 大学生の過去の「いじめられ体験」に関する調査 - 神戸商船大学の場合 - 神戸大学保健管理センター紀要, 1, 15 - 22.
- 嶋 信宏 (1992). 大学生におけるソーシャルサポートの日常生活ストレスに対する効果 社会心理学研究, 7 (1), 45 - 53.
- 清水信介 (1998). 「いじめられ体験」が人格発達に及ぼす阻害的影響について - 自己愛性格症例の治療経験から - 札幌学院大学人文学会紀要, 62, 215 - 234.
- 立花正一 (1990). 「いじめられ体験」を契機に発症した精神障害について 精神神経学雑誌, 92, 321 - 342.